

改憲・戦争翼賛勢力への転落許すな



連合幹部の手から 労働組合とり戻そう



11・5労働者集会 改憲阻止1万人行進へ

(日時) 11月5日(日) 正午～集会後デモ行進

(場所) 東京・日比谷野外音楽堂

正午～14時 戦争と民営化・労働法制解体に反対する全国労働者総決起集会

14～15時 改憲阻止！1万人大行進（15時～1万人銀座デモに出発）

11月12日 ソウルにて韓国民主労総・労働者大会（日本から代表団を派遣）

安倍・小池に翻弄され「産業報国会」の道を進む



安倍政権は、北朝鮮の核・ミサイル問題を利用して「国難突破」を掲げて解散・総選挙に訴えました。空襲警報、大本営発表まがいに騒ぎたて、ことさらに「危機」を演出し、恐怖と憎悪を煽って憲法改悪や大軍拡を強行し、戦争に踏み出す。それはクーデターに等しいやり方でした。

総選挙の過程では驚くべきことが起きました。自民党と小池新党の間で、権力の座と改憲を競い合う醜い抗争が繰り広げられ、民進党が一夜にして崩壊したのです。しかも、小池・前原・神津会談で、その引き金を引いたのは連合・神津会長でした。しかしそれは、希望の党の失速で大失敗に終わり、連合は「組織分裂の危機」（毎日新聞）を迎えています。

頓挫した安倍・逢見の「改憲プログラム」



それを遡ること3ヶ月。7月13日、新聞各紙は「連合の内紛」を一斉に報じました。連合本部が「残業代ゼロ法」に「合意」したことをめぐって、連合本部に抗議のデモが押し寄せ、何も聞かされていなかった傘下の産別や地域組織の中から猛然と反発の声が上がったのです。

それは、U A ゼンセン出身の逢見事務局長ら数人が、首相官邸と秘密協議を続け「合意」していたものでした。安倍首相は、臨時国会前に残業代ゼロ法の議論に決着をつけ、10月に逢見会長体制になれば、連合を改憲推進勢力にできると目論んでいたのです。しかし、この「改憲プログラム」は、連合内外の怒りの声で一旦頓挫し、内定していた逢見次期会長人事も取り消されました。

そして安倍政権は解散・総選挙に訴えたのです。

“U Aゼンセンよ、連合を分裂させよ”



U Aゼンセン松浦会長は、9月のU Aゼンセン大会で、「自衛隊の存在がいつまでも解釈によるのではなく、憲法に明記されることを積極的に捉えている」と、安倍首相の憲法9条改悪の考えに賛成する意向を表明しました。また、U Aゼンセンは「主権国家の防衛を考えると、単純に、徴兵制は採らない、とうたうことは、“自らは戦わない”と表明することになる」と、徴兵制まで主張しています。

そもそも、U Aゼンセンは連合を分裂させるために、安倍政権の手で育成されてきた労働組合です。

14年11月、櫻井よしこが産経新聞で「憲法改正を高らかに支持したU Aゼンセンは、官公労と決別し、連合を分裂させよ」と呼びかけたことがそれを象徴的に示しました。そして、今回の総選挙では電力総連とともに、自民党を支持したのです。

連合幹部の手から闘う労働組合を取り戻そう



職場で働く労働者、組合員とはまったく関係ないところで、連合幹部たちの手によって腐り果てた権力抗争が繰り返されています。そして連合が崩れ落ちようとしています。それは「戦争」が社会全体を呑み込んでいこうとしている情勢だからこそ起きていることです。安倍政権の攻撃が、全てを粉碎して進む戦車のように社会を破壊しているにも関わらず、連合が無為無策だから起きていることです。

「改憲と戦争だけは許してはならない」。それは戦後の日本労働組合の原点であり、最大のテーマでした。その労働組合を、労働者同士が殺し殺され合う戦争のための道具にする。こんなことを許していいはずがありません。

連合幹部に労働組合を好きにさせてはなりません。今こそ幹部の手から闘う労働組合を取り戻し、社会に登場させ、労働組合が改憲・戦争反対の中心に立つべきときです。

11月5日は世界各国から労働者が日比谷野音に結集します。とりわけ韓国、アメリカの労働者とともに朝鮮侵略戦争阻止、労働運動再生へ新たな一步を踏み出しましょう。

歴史の分岐点—戦争を止める力は労働者にある

1940 全労組解散
→産業報国会



連合の再編が始まっています。それは改憲・戦争へと事態が激しく進む時代だからこそ生み出された歴史的事態です。時代は大きな転換点を迎えているのです。

日本の労働組合ナショナルセンターが再編されたのは3回しかありません。初めの2回は直接戦争の契機になりました。1940年の産業報国会結成は、日本の第2次世界大戦・太平洋戦争突入へ。1950年の総評結成は、朝鮮戦争へ。

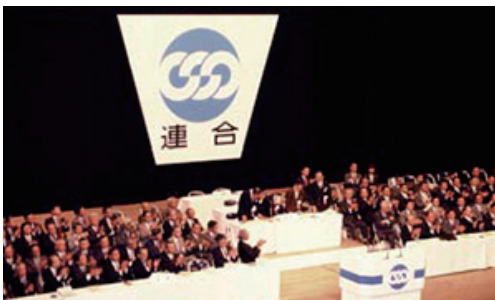
1950 産別会議
→総評



1989年の総評解散・連合結成は、87年の国鉄分割・民営化の結果でした。「闘う労働運動を一掃し、労働組合全体を労使協調の御用組合に統一する」。20年がかりで画策された歴史的攻撃でした。そして連合が結成されると、当時の竹下首相は「抱擁したい」と歓喜したのです。

連合幹部は人員削減や労働強化といった合理化攻撃に手を貸し、原発推進にも加担してきました。膨大な労働者が非正規職に突き落とされるなど、社会の大転換が起きました。

1989 総評
→連合



戦争に突き進む「挙国一致」体制を築くには、労働組合の全面的な協力が不可欠です。戦争に協力・推進するのか、反対するのか。労働組合の闘いに再び時代の焦点があたっています。

逢見事務局長が主導した残業代ゼロ法容認が頓挫した背景にあるのは、現場労働者の激しい怒りです。労働者には労働組合全体を動かす力があります。戦争を止める力はその中にこそあります。

私たちは日本の労働者として、何より朝鮮半島での戦争開始を許してはなりません。改憲も戦争も絶対に止める。その強い決意を胸に闘いに立ち上がろう。腐り果てた幹部連中を叩き出し、闘う労働運動を甦らせよう。11・5労働者集会 / 改憲阻止！1万人大行進への参加を呼びかけます。

2017 連合再編
→改憲・戦争

